

通訳の仕事—通訳者に必要な資質と能力の養成

Pour Travailler comme interprète

菊地歌子

KIKUCHI Utako

本稿は、2011年10月6日に関西大学千里山キャンパスで開催された吹田市民大学講座関西大学講座、第二回の講演の内容を元に改めて原稿を作成したものです。講演では参加者の皆さんとのやりとりが多く、そのまま書き起こした形ではまりにも話し言葉でもあり非常に読みにくいテキストになるため、より正確な資料などを元に補足して書き直しました。

非常に個人的な体験をもとにしておりますので、偏った見方になりますが、通訳という仕事についてご紹介しながら、通訳者養成から通訳者の仕事、通訳者に必要な能力などについてお話したいと思います。

1. 初めての通訳の仕事

私が初めて通訳という仕事を始めたのは1986年の秋ですから、今年で25年目になります。それまでは語学学校や大学の非常勤としてフランス語教師をしていました。1986年に論文を提出し、その解放感から、何か今までとは違うことをしてみたいと模索していました。その年に偶然フランスの恩師が日本で講演をすることになり、今考えれば言語学の専門的な講演の通訳など無謀だと分かりますが、生まれて初めて講演の通訳をしました。

通訳について何も知識がなく、準備の方法も知りませんでした。講演の通訳とはどういうものなのかも知らないまま思いつくことをして準備をしました。運の良いことに、恩師は原稿を用意して下さいました。原稿を頂き、まず全体を日本語に訳したあと、フランス語のテキストを自分で読み上げて録音し、それを聞きながら、適当な長さで再生機を停止して、準備した訳を読み上げる練習をしました。まだ不安でしたので、フランス語の録音を聞きながらメモを取り、適当なところで再生を止めて、メモをたよりに訳してみました。自分の訳を別のカセットプレーヤーで録音して聞き直し、問題がある箇所はもう一度、フランス語の再生、メモ取り、

訳、という作業を繰り返しました。幸運が重なり恩師は原稿をそのまま読み上げてくれましたので、準備した通りの通訳ができました。無事に最後まで訳した達成感は満足できるものでした。25年も前のことなのに、今もこのように鮮明に記憶に残っているのは、何日も同じ作業を繰り返したからですが、今思えば、この準備があったから今現在フランス語の通訳として仕事をしているのだと思います。

プロとしての仕事の最初のきっかけは、この恩師の講演のあと、日仏会館で開催された日仏社会学会の同時通訳の仕事を頂いたことでした。これも無謀きわまりないことだったのですが、いろいろな偶然に助けられて最後までなんとか追い返されずに続けさせて頂きました。

現在は関西大学の専任職におりますので、週末と休暇中だけですが、会議通訳者として仕事を続けています。最近の仕事としては、フランスの国会議員が日本の脳科学の最先端の状況を調査にいらした際に、いろいろな研究所に同行して最先端の研究をしておられる先生方のお話をフランス語に訳しました。その次の仕事は在日フランス商工会議所の総会で、日本語への通訳でした。仕事の分野は非常に多種多様に渡り、その都度各分野の基礎知識から専門的な用語までひたすら勉強して準備をしていきます。

2. 通訳の位置づけ

2.1. 通訳者の仕事の定義

先に進む前に、頻繁に混同される通訳者と翻訳者の仕事の違いを見極めておきましょう。通訳者として雇われて現場に行きますと、「翻訳お願いします」とか「通訳お願いします」と言われます。配布したプリントの一番目の質問「通訳と翻訳の違いは何ですか」の回答を記入してください。これは通訳という種類の仕事だ、と思う枠に「通訳」、これは翻訳という種類の仕事だ、と思う枠に「翻訳」と記入してください。

	聞いたことを訳す	読んだことを訳す
口頭で	1	2
文書で	3	4

この表の1番と2番が通訳者の仕事です。つまりインプットが音であろうと文字であろうと、アウトプットが口頭でなされる場合は通訳者の仕事になります。

2.2. 通訳方式の分類

翻訳という作業は通訳者の仕事に無関係ではありませんが、通訳という口頭で訳す仕事にテーマを絞って続けましょう。通訳方式を整理すると以下のようになります。

- 1) 逐次通訳：話し手（講演者）が区切るのを待って訳す

通訳の仕事—通訳者に必要な資質と能力の養成（菊地）

- 2) 時間差同通：テレビニュースの訳を作り、放送と同時に読む
- 3) 同時通訳：講演者と同時に訳す（通訳者はブース^{注1}に居る）
- 4) ウイスパリング：通訳を必要とする人の耳元でオリジナルと同時に小声で訳す
- 5) 随行通訳：商談などの訪問先などに同行して発言を訳す
- 6) ガイド通訳：旅行者を案内し現地のガイドの説明を訳したり解説をする
- 7) サイトラ：テキストを目で追いながら訳す

テレビのいろいろな番組で、インタビューを受けるゲストが居る場合、その横に通訳者が居て、発言の合間に通訳者が日本語に訳すのを良く見ます。これは一番目の「逐次通訳」です。逐次通訳をする時はメモを取りながら発言の内容を書き留め、そのメモを見ながら把握した内容を訳します。もう一つテレビで良く見る例は、CNNのニュースやBSの世界のニュースなどの二カ国語放送で、アフレコのように聞こえる通訳です。これは二番目の「時間差同通」または「放送通訳」という種類です。「時間差同通」というのは、ニュースなどのビデオを事前に聞いて訳文を準備します。そして放送と同時に自分が作った訳文を読み上げます。この時に注意する必要があるのは、オリジナルのニュースと同時に読んで、丁度同時に読み終わる長さにする事です。慣れないうちは、ちょうど良い長さの訳文を作るまでリハーサルも必要となりますが、慣れた人達は、最初からオリジナル言語を聞ききながら、ちょうど良い長さの翻訳をすらすらと書いています。

良く似たニュースでも、画面を注意して見ると、下端に「通訳」と書いてある場合と、「同時通訳」と書いてある場合があります。「通訳」と書いてある場合は上記の「時間差同通」をしていて、「同時通訳」と書いてある場合は、文字通り三番目の「同時通訳」をしているということです。「同時通訳」は、複数言語を使用した国際会議などで最も一般的に使用される方式で、同通訳の機材を必要とします。講演者の声はマイクを通して、会場に流れるのと同時に、ブース¹⁾に居る通訳者のヘッドフォンに届きます。通訳者はヘッドフォンでオリジナル言語（たとえばフランス語）を聞きながら、ブースに設置してあるマイクに向かって日本語に訳します。通訳を聞く必要のある参加者は配布されたイヤフォンを小さな受信機につないで使います。

次の「ウイスパリング」は、通訳者は「同時通訳」と同じ仕事をするのですが、機械を使わず、通訳を必要とする人の耳元で小さな声で訳します。この方式の通訳は、たとえば逐次通訳の講演会で、司会者の挨拶や、講演のあとに続く会場との質疑応答の際に、講演者だけに訳す時などに使います。

「同時通訳」とウイスパリングの中間的な方式として簡易同通機器の使用があります。通訳を必要とする人が3～4名を超えると、ウイスパリングでは通訳者の声が全員に聞こえなかったり、あまり大きな声で訳すと通訳者の声が発言者の邪魔になったりします。このような場合には、通訳者は会場に流れるスピーカーの音を聞き、発信器に接続されたマイクを使って訳しま

す。通訳者の声は、発信器から無線で送信され、聞き手の持っている受信機に届き、接続されたイヤフォンに届きます。この方式は、騒音の大きな工場での通訳の現場でもよく使われています。

ガイドが、外国語から母国語に訳す（またはその逆）場合は「ガイド通訳」になります。最も代表的な形は、たとえばフランス人が京都の名所旧跡を尋ねる場合に日本人のガイド通訳者が同行し、お寺のお坊さんの説明をフランス語に訳したり、移動の途中に見えるものの解説を直接フランス語でします。通訳業の中でこの業種のみ国家資格を必要とします。

最後の「サイトラ」はサイト・トランスレーションの略語で、テキストを目で追いながら訳します。「同時通訳」をしている国際会議で、アピール文を読み上げる場合など、事務局からテキストを渡されて、それを目で追いながら、代表者の読み上げと同時に別の言語に訳します。通常はテキストを渡されてから大急ぎで概要を把握する位の時間の余裕しかありません。あるいは、食事会などで、参加者に関連する新聞記事などを突然渡されて、ざっくり訳してあげてください、などと言われる時には「サイトラ」をします。

2.4. 実例の紹介

通訳の仕事の例はテレビでますます頻繁に聞けるようになりました。CNNのニュースでは、いつでも英語からの時間差同通や同通を聞くことができます。BSの世界のニュースではいろいろな外国語からの通訳を聞くことができます。また紀行番組では、現地の人々の発言にはほとんど字幕スーパーがついていますが、たまに通訳者がカメラに写ることがあります。1995年に、NHKの世界遺産の旅特集で、フランスのプロバンス地方のアビニョンが紹介されたことがあります。この番組では取材班に随行した通訳者の活躍を見ることができます（DVDを再生）。

まずはナレーターが日本語で視聴者に話しかけます。

「今日も南フランス、プロバンスを旅しています。私たちが今いる場所ご覧いただけますか？ ローヌ川にかかった石橋の上にいるんです。きれいですね。はい。この橋、途中で途切れているとても珍しい形の橋なんです。さあ、別のカメラの角度からこのローヌ川のゆったりとした流れ、そしてこの橋の様子をご覧くださいませ。」

この部分では、司会者が言っている日本語をフランス語に訳す必要がないので、画面には現れません。カメラマンが現地の人で、スタートとかストップとか撮影に関する指示等をフランス語に通訳をしている可能性はあります。インタビューが始まると通訳が必要となりますので、今の時点ではまだ通訳者は画面に映っていませんが、キャスターが話しているフランス語を聞いて準備を始めているはず。時間の節約の為にキャスターの日本語を現地の人に訳す時はウイスパリングに近い逐次通訳になることが頻繁にあります。現地の人々が質問に答える時

は、次のシーンのように逐次になります。

フェスティバル参加者：C'est quelqu'un qui jongle avec les mots de la langue française.

通 訳 者：ユーモアのあるお話を一人でやる人の PR にきています。

レポーター：今のところ、手ごたえはいかがですか？

通 訳 者：Ça marche pour vous?

フェスティバル参加者：Très très bien, ça marche très bien. Ça fait dix ans que nous travaillons à Avignon off.

通 訳 者：10年間もこの自主公演のところにきてるんですけども、今年もとってもうまくいっています。ありがとうございます。

この例のように、通訳者の姿が画面に出て、その場で訳している様子まで放映される番組はまれです。外国の町のレポート番組は通常は編集してあり、現地の人が言ったことはほとんどの場合スーパーになっています。まるでその現地の人とレポーターが直接話しているかのようにみえます。このような番組も編集前は、今ご紹介したNHKの番組のように逐次通訳とウイスパリングの入り混った通訳を介してコミュニケーションが成立するという状態だったのです。

3. 通訳者の位置づけ

3.1. 派遣通訳

ほとんどの通訳者は、フリーで仕事をし、エージェントと呼ばれる規格会社や人材派遣会社などに登録をしています。通訳者の派遣を含め、大きな国際会議全体の手配ができ、さらに通訳者や翻訳者の養成校も経営している大手のエージェントとしてはサイマルインターナショナル、インターグループ、日本コンベンションサービスなどあります。一連のエージェントの仕事の中ではフランス語の仕事はほんの一部で、英語—日本語の通訳業務が大部分を占めています。

3.2. 通訳者のカテゴリ

どのような職種でも経験年数や資格によってランク付けがありますが、通訳の世界も同じです。通訳者を雇う時には、どのカテゴリの通訳者が必要かを知る必要があります。ある派遣会社のサイトには次のような分類が紹介されています。

A 会議通訳、B 一般通訳、C 随行通訳、に分類されています。Aクラスは「同時・逐次など形態に関わらず、専門性の高い分野において、的確な通訳が可能。通訳経験

10年以上」。Bクラスは「正確な逐次通訳が可能。一般的な分野において、同時通訳も可能。通訳経験5年以上」。Cクラスは「商談、随行、ガイド通訳が可能」。

このような分類は通訳者を雇う、または派遣する場合の目安として示してあるのですが、ランクによって仕事の難易度と共に報酬も異なります。通訳者として初めてエージェントに登録するときは極一般的なケースではCクラスで始めます。たとえば国際見本市のスタンドにいて、見学者と出展者の話を訳しますが、本格的な商談や契約はBランク以上の通訳者が交代します。仕事を続けて何年か経つと少しずつ難しい仕事を依頼されるようになり、5年ほど続けて難しい仕事の依頼が続くようになると、通訳者自身がエージェントに昇格を打診したり、エージェントから雇用契約の更新の際にランクの変更を提案したりしてBクラスに昇格します。次のステップでAクラスへとランクが上がっていきます。ただし人によっては最初からBクラスやAクラスで登録することもありますし、逆に10年以上ずっとCクラスやBクラスの仕事を続ける人も居ます。Cクラスにガイド通訳も可能、とあり、報酬もCクラスと同じ程度ですが、ガイド通訳者の仕事の内容は単なる通訳だけではなく、国家資格を要する特別な位置づけになります。

放送通訳は、ランクとしてはAからBクラスになりますが、エージェントから派遣されることがほとんどなく、放送局から直接依頼されます。さらに外国の大使館の通訳専門のスタッフも含め、企業内通訳者、あるいは国連やOECDなどの国際組織に所属している通訳者は特に英語では大変な人数に上ります。

4. 通訳者になるために必要なこと

4.1 外国語のレベル

どんなカテゴリ、どんな通訳方式でも、通訳者に必要な共通の能力があります。まず第一に高い外国語運用能力が必要です。当然のことですが、外国語をネイティブと同じように話せるということではありません。聞き取り能力としては、外国語のニュースを一度聞いて、概要が日本語で言える程度が目安になります。BSの世界のニュースで自分のレベルを試してみることをお勧めします。また抽象語彙や難しいことを良く知っていて、話すことも出来ても、基本的な構文の間違いや不適切な語彙の選択があまり目立つと、以外なところで情報が正しく伝わらない危険性に繋がります。パリの通訳者養成校 ESIT では、人が微笑んでしまうことのないフランス語、という基準があるそうです。普通に情報を聞き取ることができる発音で、正しく情報が伝わる構文であり、適切な語彙を駆使する能力が要求されるということです。

訛りに関しては、標準語が話せることが望ましいのは明らかです。アメリカ人が東北弁でテ

レビで自由に発言している限りは全く問題ありませんが、記者会見などで壇上にアメリカ人が居て、その横にいるもう一人のアメリカ人が日本語に通訳する場合、英語訛りの日本語は許容範囲ですが、東北弁や関西弁で日本語に訳す場面を想像してみると、少々違和感があります。ESIT で言う「人がほほえんでしまう」外国語ということになるでしょう。

外国語の高い運用能力と同程度に大切なことはあらたまった日本語が話せることです。たとえば適切な敬語が使えないと、会談の最初などは挨拶で始まりますので、この時点で丁寧な表現が使えなかったり、決まり文句を知らないと、大変失礼なことにもなりかねません。特に文の最後はきちんと終わることが大切です。

外国語の語彙も多い方が良いことは言うまでもありません。たとえ会食でも参加者によってはかなりの専門用語が飛び交う可能性もあります。個人的な経験としては、極一般的な文化交流の会議のあとの会食の間に、「私は実は医者でして、産褥熱が専門なんです」などと自己紹介が始まったことがあります。文化交流の準備しかしていないのに、産褥熱の話はしないでくださいとは言えません。日本語では産褥熱といわれれば意味は分かりますが、フランス語ではよほど運が良くない限り普通の通訳者が知っている語彙ではありません。このような場合には、産婦人科の医師だったという部分だけ訳してもその後の会話で誤解が生じる可能性がありますので、産褥熱を、出産の時に母親が高熱を出す病気、というように必要な単語を知らない場合は、英語やフランス語でその意味を説明できる能力が必要になります。

通訳の仕事はあくまでも口頭でアウトプットすること、と始めに確認しておきました。では外国語を正しく書けることは通訳者には不要でしょうか。特に会議通訳者には話し言葉だけではなく、限りなく書き言葉に近い言語の運用能力が要求されますので、かなりの読書量が基礎能力の形成時期にあったことが前提となります。読むことと書くことが連動していると想定するならば、会議通訳者は書く方の能力も高いという想定が成立します。実際にほとんどの会議通訳者は書く方も高いレベルにいるようです。逆のケースを考えると、フランス人が日本語からフランス語に通訳するためには、日本語が速く読めないと、準備に長い時間がかかりすぎて仕事にならない、間に合わないことにもなります。さらに言えば、外国語の習得に関して、正確に書けないままでどんなに時間をかけても、会議通訳で使える外国語までは到達しないというのが私の持論です。

関係する分野は多種多様です。新しい分野の仕事をする度にかかなりの量の資料を読まなければなりません。また語彙を準備するためにはいろいろ調べる必要があります。会議通訳者達は基本的に調べることが好きな人が多いように思います。大きな会場でマイクがない場合がありますので、必要な時には大きな声が出せることも必要です。

Bクラスの仕事を為するには一般的なテーマとはいえ、新聞で話題になっている世界の動向や、政治・経済、通商など一般常識に関する語彙は必要になります。会議のあとなのでリラックスして、食材の話やオプションのイベントの紹介など一般的な話題に終始することが確実に

あれば、BクラスやCクラスの通訳者でも訳せる内容であることが予想できます。同じような夕食の雑談としても、日中に専門的な会議があり、その続きを少人数で食事を取りながら議論することが予想される場合には、通訳者はBクラスやCクラスの通訳者でも、Aクラスと同等の語彙の準備が必要になります。

4.2. 通訳の仕事が始められる外国語のレベル

通訳者として仕事を始められるレベルはどの程度でしょう。将来通訳者を目指す人にはどの程度まで勉強すれば仕事ができるのか目安が必要かと思います。外国語を習い初めて何年で通訳という仕事が始められるのかは個人差とチャンスによります。十分な実力があってもチャンスに恵まれなかったり、まったく興味のない期間が長い可能性もありますので、一概には言えません。帰国子女は別として、どんなに速習クラスで学んだとしても5、6年の学習年月は必要でしょう。空港に迎えに行きホテルまで案内する。展示会で受付のアルバイトをする。または展示ブースで通訳をするなどの仕事から始めるとしても、日常生活に必要な語彙、構文、一般的な知識は必要になります。

一方帰国子女や何年か外国に滞在して日常不便を感じない能力があると自負している人から通訳になりたいと言われることがよくあります。たとえフランス語の総合能力が通訳養成コースの入学試験に受かるレベルであっても、通訳の模擬授業をすると、受講生自身が大人の言葉遣いになっていないことに気づく、あるいは構文能力や語彙が大幅に不足していることを自覚することがよくあります。

また本人が日常の意思疎通に不便を感じないからといってその外国語の能力が通訳するのに足りるとは言えません。日常の意思疎通は、自分が言いたいこと、自分が言う必要があることに限られ、言えなければ諦められます。例えば水道の修理を頼んだ時に、細かいところ不満があっても、それが説明できない時には自分の問題なら諦めることはできます。ところがその不満のある人に雇われた通訳者は諦めては仕事になりません。つまり他人が言いたいことを言葉にして伝えられるレベルの外国語が必要なのです。しかも通訳を雇う人は何らかの専門家でその専門領域の話をしてもらいます。従って日常生活の語彙や構文だけでは歯が立ちません。

外国語の能力検定としては英検、仏検などがあります。検定試験の1級に受かるということはかなりの運用能力、理解力、語彙があるということの証明です。例えば自分の会社にフランス人が来るので、食事の間だけでいいからちょっと通訳してくれないか、と頼まれた場合には、1級を持っていれば、まあなんとかなるかなというレベルです。通訳者になるために通訳者養成校に行き、そこでたまたま仕事に来て、それを受けたところが全く使い物にならず、能力不足のレッテルを貼られるということが時々あります。このようなことを避けるために、どの程度の能力で、どのような仕事なら引き受けても良いか自覚しておくことと最初につまづく危険性を

さげることができます。通訳の世界、特にフランス語の通訳の世界は狭いので、実際より低い評価が一人歩きしてしまうと後が続かないこともあり得ます。

多くの英語通訳者は英文科出身です。中高大で英語を本気で勉強すれば通算10年になります。途中で留学をしていれば、大学を卒業する時には高い能力を持っていることになりますので、卒業時点で政治・経済用語も習得し、いろいろなテーマにも慣れていれば、企業内通訳など分野が固定されていて準備がし易い状況なら通訳の仕事始めることは可能でしょう。フランス語の場合、仏文科の学生でもほとんど大学1年次にフランス語を習い始めますので、卒業時点で学習歴4年にしかなりません。卒業時点で通訳の仕事始めるのは少し無理があると思われます。それでも途中で1年留学し、語学学校の上級クラスあるいは学部の授業を受けて単位が取れるほどの高い能力があれば、卒業後就職した企業内で、たとえばフランスからのデレゲーションの取引先への案内や、食事中の通訳などはできると思います。

ガイド通訳は外国語の能力と同時にいろいろな知識が必要な国家試験があり、資格が無いとできません。それ以外の通訳は実力だけです。

5. 通訳の養成機関

5.1. 大学での通訳養成

英語の場合は中高ですでに6年間英語を勉強していますし、帰国子女も多いので、大学で本格的な通訳訓練を受けることができます。直接関係するという理由から、まず、トップに関西大学を挙げておきます。外国語学部には通訳の授業があります。通訳養成コースという形で独立してはいませんが、学部の1年次から通訳を目指すことができます。2年生は全員留学し、3年次にまた通訳・翻訳の特訓を受けることができます。大学院に行っても練習が続けられます。在学中に何年間か続けて訓練を受けるので、かなり高いレベルの通訳ができるようになります。通訳練習の授業は、4つ練習用のブースが設置された教室で行います。ここでは録音や教師の発言を4ブースで学生が一斉に同時通訳をして、教師が採点するという授業ができます。他の外国語学部のある大学では、東京外国語大学、上智大学やICUにも通訳コースがあり、神戸女学院大学の通訳養成コースなど東京以外にも多くの大学に通訳訓練の授業があります。

残念ながらフランス語での通訳者養成コースはありませんが、通訳の練習ができる授業はいろいろな大学で提供しています。

大学の通訳訓練コースを終了して国際会議で通訳として仕事をするのも全く不可能ではありません。たとえば国際会議でもメイン会場以外に部会やアトリエがある場合など、メインの会場の通訳はベテランを配置します。同時通訳では1ブース3人が標準なので5つアトリエがあれば15人必要になります。そのような時にベテランの通訳者の数が足りない場合に、2人はベテラン、もう1人はBクラスからAクラスに行けそうな通訳者という組み合わせにして必要

なチームの数を揃えたりします。英語で大学の通訳訓練コースを終了して、Bクラスで仕事を始めているのならば、会議通訳者としてデビューのチャンスです。

5.2. エージェントの通訳養成校

サイマルインターナショナル、インターグループ、日本コンベンションサービスなどは国際会議や記念行事などの企画から実施まで全体の運営の一環として通訳派遣をしています。専属の英語や中国語の通訳者がいます。このような大手のエージェントが提供している通訳者養成コースで通訳の訓練を受けることが出来ます。英語や中国語では上級英語・中国語のレベルから本格的な同時通訳の訓練まで一貫したコースで訓練を受け、専属になり、会議通訳者として仕事を始めることが可能です。英語以外の外国語の場合は、受講生のレベルと人数の問題がつきまといま。エージェントや語学学校の通訳という名のついた授業はせいぜい週一回の授業しかありませんので、自分の知識や外国語の不足部分などに気づききっかけや練習方法の発見にはなりますが、そこで訓練を受けて技術を磨く練習は充分には出来ません。

自分が関わっているサイマルの新宿校でのフランス語の通訳養成コースをご紹介します。フランス語のクラスは3つです。その一番下のレベルのクラスを担当しています。一番上のクラスにいる人はもう実際に、随行通訳とか、ガイド通訳をしていて、会議通訳を目指している人達です。上から二つ目のクラスは、そろそろ通訳の仕事が始められる、あるいは時々仕事があるけれど、もう少し学校に通って技術を磨きたいというレベルです。私が担当しているクラスは通訳者になるにはまだ少々フランス語が足りないというレベルです。このクラスの人の到達目標の目安は、どのような内容でも、外国語のテレビやラジオのニュースを聞いて日本語で概要が言えることです。他の仕事をしながら週一回の授業を受け、会社で通訳を頼まれるようになったとか、何年かかけて上のクラスに上がり、Cクラスの仕事を始める人が時々居ます。即効性のある授業ではありませんが、存在意義はあるものと考えています。

5.3. 国際的な通訳養成校

通訳養成専門校はフランス、スイス、スペイン、イギリスに代表的な養成校があり、パリにはエジット (Ecole Supérieure d'Interprètes et de Traducteurs²⁾) があります。現在のところパリのエジットで2年間のコースを卒業し、実際に通訳者になっている日本人が3人居ます。入学には大学卒業資格と母国語以外に外国語が2言語できることが条件になります。例えば日本人は母国語の日本語が第一言語、A言語になります。フランスの養成機関なのでフランス語がB言語で、英語がC言語です。ですから三ヶ国語をマスターしていることが入学の条件になります。

この種の養成校は会議通訳者を養成する機関であり、外国語のレベルは専門的な内容の理解ができ、話すことができることが入学時に要求されます。卒業の基準は、現役の通訳者でもあ

る教師が、明日からでも一緒にブースに入っても良いと判断できること、なのでこのような養成校を卒業すれば、翌日からでも会議通訳者として国際会議などで仕事ができるのです。

6. 通訳者の日常

6.1. 最初の仕事のきっかけ

通訳者を目指して勉強をし、実力もついて、そろそろ通訳の本格的な仕事をしたいと考えた時、どのようなルートで仕事をみつけることができるでしょう。今フランス語の会議通訳者として活躍している人達がどのようにして最初の仕事を得たのかをすべて知っているのではありませんが、ほとんど、他の通訳者からエージェントに紹介されたり、仕事を直接紹介されたりしたのではないかと思います。エージェントに突然履歴書を送ってもそれに反応してくれることはないと思います。留学から戻り、とりあえずサイマルの通訳コースに通うつもりで入学試験を受けたら、教師から「あなたは授業に出る必要はない」といわれすぐにエージェントに紹介されたというケースもあります。

通訳について講演や授業をすると、通訳者になりたいがどこに行けば良いでしょう、と質問されることがありますが、そのような場合はまずは養成校に登録してつてを作ることを勧めています。授業で目立つほど能力が高ければ何か通訳者を必要としている時に教師から声を掛けてもらえますし、エージェントに紹介してもらえる可能性もあります。

6.2. 仕事の準備

ある日エージェントからまたは直接主催者から通訳の依頼を受けたとします。まず日程が合うかカレンダーを見ます。そして内容によって準備にどのくらいの日数が必要かを考えて、引き受けるかどうか判断します。

通訳の仕事の準備を、アジアフランコフォニーの3日間のシンポジウムという会議通訳の場合を例に説明します。準備として真っ先にするのは講演のテーマの範囲をしぼることです。たとえば、この会議のタイトルは以下の通りです。

Université francophone d'Asie de l'Est – UNIFA 2011 “Identités, démocraties, mondialisation”

副題に「アイデンティティ、デモクラシー、グローバリゼーション」という単語が3つ並んでいます。とても幅広いテーマですが、開催趣旨を読めばおおよその方向性は想定できます。ではアイデンティティとは？デモクラシーは民主主義、してその定義は？この会議ではどのような視点で取り上げるのか？グローバリゼーションとアイデンティティと並び、フランコフォニーとの関係は？などなど疑問点を整理しながら単語帳の準備に取りかかります。

準備のための資料は、テーマによってことなり、最適なものは一つに限定されませんが、講演の場合は、講演者のプロフィールを調べればどんな人がどんな話をするのかが分かります。この会議で担当した講演の中に Michel Wieviorka 氏の「ライシテと宗教的マイノリティ、政教分離から承認の原理へ」というタイトルでの講演があります。このような講演はまず原稿があることが予想できますので、エージェントや窓口になった組織や人を通して、講演者に資料提供を依頼します。講演者が原稿を書き、それをシンポジウムの主催者に渡し、主催者から通訳者に原稿が届きます。1日の同時通訳の仕事は必ず3名（またはまれに4名）でチームを組みます。プログラムを見て3人で担当箇所を決めます。だいたい15分から長くても20分までで交代しますので、一人の講演が30分単位で並んでいれば、一人の講演者を2人で分担します。原稿が届く時点で、その原稿のどこで交代するかを二人で決めます。

どんなに難しい内容でもゆっくりと話し言葉の文体で話してくれればなんとか訳せます。しかし密度の濃い文章を読みあげられてしまうと、同時通訳ではとても訳せません。原稿を早口で読み上げられると、通訳も事前に書いておいた訳文をそのまま朗読しないととてもついていきません。ただし、訳を作るためにじっくり考えている時間がない時は、頭から読みながら、猛烈なスピードで日本語訳を作ります。だいたいA4一ページ全部書いてあって、30分で訳分を準備することを想定して、本番までの残りの時間を計算します。従って10ページの原稿は5時間と余裕をプラスして6時間から7時間あればなんとかなる、と計算します。大急ぎで訳した例をほんの一部ですが読んでみます。

Les identités culturelles, religieuses ou «naturalisées» ne sont-elles pas aujourd'hui, plus qu'hier, indissociables de situations sociales faites d'infériorisation ou d'exclusion?

文化的、宗教的、あるいは帰化したアイデンティティは今日では過去よりいっそう、劣勢化や排除で出来た社会的状況と分離不可能になっているのではないか？

この訳では、読めば分かりますが、このまま通訳者が読み上げるのを聞いた場合には、意味を把握するのは非常に困難です。ですから現場ではこのように自分が準備した日本語を見ながら、聴衆が聞いてわかるようにできるだけ分かり易く訳すようにします。「アイデンティティには文化、宗教上のものがあり、さらに帰化したアイデンティティがあります。いずれも、昔に比べて今日では、差別や排除といった側面をもった社会的状況と分けて捉えにくくなっているのではないだろうか」。この方が幾分把握し易くなっているのではないのでしょうか。ただし話言葉にするとどうしても長くなり、その分速く訳を言わなければなりませんので、講演者には常にゆっくりと話してくださいとお願いします。人によっては講演になれていてとてもゆっくりと明瞭にお話してくださることもありますが、早口のままの人がとても多く、通訳者が息切れする

ことも多々あります。

こうして訳を作りながら、キーワードや、知らない単語をメモして、単語帳を作ります。単語帳を作るといっても仕事の間に使えるのではありませんが、単語帳作りという形で専門用語の用法や定義などを確認していきます。

通常は当日または前日に打ち合わせがありますので、分からない部分の意味を確認したり、原稿を読み上げるのか、それとも原稿に沿って同じ話をするのかを講演者に確認します。原稿を読み上げる場合は特に詳細に変更や削除する箇所を確認して、訳を修正しておきます。本番では原稿と講演者の声を頼りに必死について行きます。

仕事の後は、現場の収穫を反映して単語帳の整理が必要ですが、自分はなかなか十分な整理ができません。整理が上手な通訳仲間がうらやましいと思います。この例に挙げた会議ではテーマの民主主義を百科事典で調べたところ、～民主主義という表現が数種類あることに気づきました。通訳の経験 25 年も経ってこんなことを知らないことにも自分で驚きましたが、代表制民主主義、議会制民主主義、直接制民主主義など日本語の百科事典とフランス語の百科事典と一般的な辞書で調べて訳語と定義を整理しました。いつか類似の仕事が来て、この時作った単語帳が活用できると良いのですが、二度とないかもしれないし、5、6 年先か、10 年先か分かりません。でもこの仕事を通して幾分でも民主主義に関する知識を得られたことにとっても満足しています。

通訳者の日常のほんの一瞬をご紹介します。いつも準備が間に合わないわとあせっております。

注

- 1) 会議場の後ろにあるガラス窓のついた小さな箱や、映写室のとなりの小部屋などが通訳ブースです。
- 2) 入学条件などは <http://www.univ-paris3.fr/bienvenue-sur-le-site-de-l-esit-63854.kjsp?RH=1257522045619> を参照